

蜻蛉日記中巻の表現構造

——鳴滝籠りをめぐって——

大倉比呂志

—

道綱母は天禄二年六月四日、「さきのやうにくやしきこと（注
—兼家の「前渡り」）もこそあれ、なほしばし身を去りなむと思
ひ立ちて、西山に、例のものする寺あり、そちものしなむ、かの
物忌（注—兼家の物忌）果てぬさきにとて」、鳴滝般若寺に立
したわけだが、鳴滝籠りを決行するに至った彼女の内面の過程
を、作者道綱母が執筆時においてどのような表現を用いて叙述し
ようとしたかに關していささか述べてみることにする。

二

先ず天禄元年五月の条に、

婦りなどせし人、おこたりてと聞くに、待つほどすぐるこ
ちす。あやしと、人知れず今宵をこころみむと思ふほどに、
はては消息だになくて久しくなりぬ。めづらかにあやしと思

へど、つれなしをつくりわたるに、夜は世界の車のこゑに胸^⑤
うちつぶれつつ、ときどきは寝入りて、明けにけると思ふに
ぞ、ましてあさましき。

とあるが、これは傍線部からも理解されるように、道綱母が自邸
の門前を通過する車の音に対して、表面的には平生を装いながら
も^④、内面ではその音への意識を先鋭化させた^⑤記事だ
が、すぐ後に「夜見ることは三十余日、昼見ることは四十余日
なりにけり」「心もゆかぬ世とはいひながら、まだいとかかる目
は見ざりつれば」とあることから推察されるごとく、この期間
は兼家の途絶えが顯著になった時期でもあった。それはまた波線
部の記事によってもうかがわれよう。その理由は、七月に入っ
て、

心ばへ知りたる人の、「失せたまひぬる小野の宮の大臣の御
召人どもあり。これらをぞ思ひかくらむ。近江ぞ、あやしき
ことなどありて、色めく者なめれば、それらに、ここに通ふ

と知らせじと、かねて断ちおかむとならむ」といへば、「いでや、さらずとも、かれらいと心やすしと聞く人なれば、なにか、さわさわさうかまへたまはずともありなむ」などぞいふ。「もしさらずは、先帝の皇子たちがならむ」と疑ふ。とあるように、他者（おそらく道綱母の侍女だろ）を通して兼家の愛人の出現が彼女の耳に達するのだが、近江という新らしい女、あるいは先帝の皇子の出現が間遠の原因であったと記されていることからうかがえよう。

さて、その「前渡り」のことだが、天禄二年に入ると、正月の条に集中的に記されている。

①さて、年ごろ思へば、などにかあらむ、ついたちの日は見えずしてやむ世なかりき。さもやと思ふ心遣ひせらる。未の時ばかりに、さき追ひののしる。そそなど、人も騒ぐほどに、ふと引き過ぎぬ。急ぐにこそはと思ひかへしつれど、夜もさてやみぬ。（中略）かくしもやすからずおぼえいふやうは、このおしはかりし近江になむ文通ふ、さなりたるべしと、世にも言ひ騒ぐ心づきなさになりけり。さて二三日も過ぎしつ。

②四日、また申の時に、一日よりもけにのしりて来るを、「おはしますおはします」といひつづくるを、一日のやうにもこそあれ、かたはらいしと思ひつづ、さすがに胸走りするを、近くなれば、こなるをのこども、中門おし開きて、ひざまづきてをるに、むべもなく引き過ぎぬ。

③またの日は大變とてのしる。いと近ければ、今宵さりと

ところみむと、人知れず思ふ。車の音ごとに胸つぶる。夜よきほどにて、帰る音も聞こゆ。門のもとよりもあまた追ひちらしつづくを、過ぎぬと聞くたびごとに、心はうごく。かぎり聞きはてれば、すべてものぞおぼえぬ。

さらには五月の条にも、

④あさましき人、わが門より、例のきらぎらしう追ひちらして、渡る日あり。行なひしめたるほどに、「おはしますおはします」とののしれば、例のごとぞあらむと思ふに、胸つぶつと走るに、引き過ぎぬれば、みな人、おもてをまぼりかはしてゐたり。われはまして、二時三時まで、ものも言はれず。（中略）胸の焦がることは、いふかぎりにもあらず。

とある。以上の例から考えると、①は元日の記事で、兼家の「前渡り」に対して、「ついたちの日は見えずしてやむ世なかりき」という道綱母の自負心のせい、兼家が「人も騒ぐほどに、ふと引き」過ぎても、「急ぐにこそはと思ひかへ」す余裕が彼女にはあるが、②になると、兼家の「前渡り」が理性の上では「一日のやうにもこそあれ、かたはらいしと思」うものの、それでも「さすがに胸走り」と兼家の来訪が待たれていると記されているわけだが、「胸走りする」という叙述に彼女の期待と不安とが端的に表現されている。③においても同様、④「車の音ごとに胸つぶる」とか⑤「過ぎぬと聞くたびごとに、心はうごく」とあるごとく、兼家の来訪が彼女の意識裡において期待されていたふしうかがわれるが、その期待が虚しいものだと思つた時、彼女は茫然自失し、言うべき（ことば）をも喪失してしまふ、それが⑥

「すべてものぞおぼえぬ」という叙述なのだ。④は五月の条の記事だが、それにおいても、兼家の「前渡り」を理性の上では「例のごとぞあらむと思ふ」ものの、それでも④「胸つぶつぶと走る」ことから、兼家の来訪が道綱母の内面ではどれほど大きな位置を占めていたかがうかがわれよう。だが、その期待が虚しくなった時には、⑥「二時三時までも言はれず」⑦「胸の焦がれることは、いふかぎりにもあらず」とあるごとく、彼女は絶望の奈落へと陥ってしまうのだ。そして、この後六月に入って、「さきのやうにくやしきこと（注―兼家の「前渡り」もこそあれ、なほしばし身を去りなむと思ひ立ちて、西山にある寺（鳴滝般若寺）に出かけて行ったことが続いて記されているが、それは後述するように、表現構造の面から考える時、極めて重要な意味を帯びて来よう。

上述のような兼家の「前渡り」が頻繁に続いたために、道綱母は「前渡りせさせたまはぬ世界」を求めて鳴滝に籠ってしまふわけだが、ここで注意されることは、②「さすがに胸走りする」③「胸つぶる」④「胸つぶつぶと走る」のごとく、兼家の「前渡り」に対して、作者道綱母が彼女の内面を記すのに、ほぼ同一な表現をとっていることだ。もちろん、それは他の「へことば」では記すことができないほど、彼女にとっては衝撃であったにちがいないが、理性の上では②「一日のやうにもこそあれ、かたはらいたしと思ひつつ」④「例のごとぞあらむと思ふに」のように、彼女は今までの体験から兼家の「前渡り」に対して諦念めいた吐息をもらしてさえている。が、やはり彼女の内面では兼家の来訪が待

たれたわけだから、これらには兼家に対する彼女の潜在化した内面が表現されているはずだ。それは当然「へことば」となって現象化されよう。とすれば、同一の表現構造は一体何を意味するのだろうか。作者道綱母は他に言うべき「へことば」を忘れてしまったのだろうか。いや、そうではあるまい。作者道綱母は同一の「へことば」でしか彼女の内面を表現できなかったのだ。逆接的に言えば、同一の「へことば」しか使用できなかったということは、それだけ兼家に対する期待と不安との両極に揺動く彼女の内面の振幅が大きかったことを強調することになる。だからこそ、作者道綱母はその両極に拡散する彼女の内面を収束すべき「へことば」を体験の時点から時間が隔たったと考えられる執筆時においても所有できなかったのだ。それは「わばへことば」の「停滞」であると言えよう。だからこそ、作者道綱母がこれら同一な表現をせざるをえなかったところに、彼女の兼家に対する期待と不安とが交錯し、それが彼女に苦悩をもたらしているのは当然だが、彼女の内面を鋭角的に剔抉していることにもなる。そのために、このような膠着した局面を打開すべく鳴滝に籠るという行動に出ざるをえなかったのだと作者道綱母は表現したのだ。それは彼女を鳴滝籠りに赴かせた過程の一端の説明としてなされた表現構造だったと言えよう。

さらに、天禄元年から翌二年にかけて、次のように記されている。

⑤（鹿ノ）いとうら若き声に、はるかにながめ鳴きたなり。（中略）見やりなる山のあなただかりに、田守のものの追ひたる

声、いふかひなく情なげにうち呼ばひたり。かうしもとり集めて、肝を砕くこと多からむと思ふに、はてはあきれてぞゐたる。(元年七月)

⑥殿はあなたがまにと聞くにも、ましてあさまし。またの日も、昨日のごと、まゐるままに、えしらで、夜ざりは、「所の雑色、これらかれら、これが送りせよ」とて、先立ちて出でにければ、ひとりまかで、いかに心に思ふらむ、例ならましかば、もろともにあらましをと、幼きここに思ふなるべし、うち屈したるさまにて入り来るを見るに、せむかたなくいみじく思へど、なにかひあらむ。身ひとつをのみ切り砕くこちす。(同右)

⑦雨の脚おなじやうにて、火ともすほどにもなりぬ。南面にこのごろ来る人あり。足音すれば、「さにぞあなる。あはれ、をかしく来たるは」と、わきたぎる心をばかたはらにおきて、うち言へば、年ごろ見知りたる人、向かひみて、「あはれ、これにまさりたる雨風にも、いにしへは、人の障りたまはざめりしものを」と言ふにつけてぞ、うちこぼるる涙のあつくてかかるに、おぼゆるやう、

思ひせく胸のはむらはつれなくて涙をわかすものにざりける

と、くりかへしいはれしほどに、寝るところにもあらで、夜は明かしてけり。(十二月)

⑧(二十五日)なほ雨やまで、つれづれと、「思はぬ山に」とかやいふやうに、もののおぼゆるままに、尽きせぬものは涙

なりけり。

降る雨のあしも落つる涙かなこまかにものを思ひくだけば(二年二月)

⑨つれなきは、そこに夜うち更けて見えたり。例のわきたぎることも多かれど、程狭く人騒がしきところにて、息もえせず、胸に手を置きたらむやうにて、明かしつ。(三月)

⑩「御門にて車立てり。こちやおはしまさむざらむ」など、やすくもあらずいふ人さへあるぞ、いと苦しき。ありしよりもまして心を切り砕くこちす。(同右)

⑪あさましき人、わが門より、例のきらざらしう追ひちらして、渡る日あり。行なひしめたるほどに、「おはしますおはします」とののしれば、例のごとぞあらむと思ふに、胸つぶつぶと走るに、引き過ぎぬれば、みな人、おもてをまぼりかはしてゐたり。(中略)わづかにためらひて、「いみじうくやしう、人に言ひ妨げられて、いままでかかる里住みをして、またかかる目を見つるかな」とばかりいひて、胸の焦がるることは、いふかぎりにもあらず。(同五月)

傍線部のごとき身を切裂くような表現は、他の個所では単発的であり、これほどまでに集中的に用いられてはいないところからも、これらはいわば中巻の表現の特色であると考えられる。⑤は他人の噂から兼家の新らしい愛人近江の存在を知った道綱母が石山詣でに出かけた折の彼女の感懐であるが、彼女の自然への接し方に近江の出現に伴って苦悩する心境が傍線部のように反映されている。⑥は相撲の節会の時、兼家が道綱の世話をしないで従者

に頼んだ折の記事であるが、「例ならましかば、もろともにあらましを」とこの時点における道綱母と兼家との関係に触れて、彼女が道綱の心中を付度したものである。⑦は雨模様、他人のことはに触発された時の記事であるが、他人による兼家の道綱母に対する「へいにしへ」の待遇と「へいま」のそれとの比較からもたらされた彼女の感懐である。⑧は「思はぬ山に」という和歌的表現に引かれての感懐であり、⑨は兼家来訪の折の記事、⑩は他人の噂に触発された彼女の所感である。⑪は兼家の「前渡り」に對して道綱母の抱いた感懐である。以上のごとく、道綱母の内面が傍線部のように記されているわけだが、それらに共通することは彼女の切裂くような心の疼きが明確に形象化されていることだ。なお、⑨の直後に「なはしもあるべき心を、また今日や今日やと思ふに」と記されているように、道綱母は兼家の来訪を期待しているふしがかがわれるのだが、それによっても、我身を切裂く状況の中で、夫兼家の来訪を待たねばならないという彼女の内面の複雑さが露呈していると言えよう。これらの例からもうかがえるように、筆舌に尽くし難いほどの道綱母の「悲哀」が、ほぼ同一の「へことば」で表現されている（⑤⑥⑧⑩と⑦⑨）。さらに、⑩と⑪の記事との間に、彼女のありようが「きはめて幸ひなかりける身」「はかなかりける世」と総括されているのだが、いずれもが鳴滝籠り決行の直前のものである点を考えると、前述の⑤⑥⑧⑩、あるいは⑦⑨の表現構造がほぼ同一の「へことば」による繰返しとなっているのは、作者道綱母にとって、彼女の内面を表現するのに、別の「へことば」を使用できないほど、それだけ彼女自

身閉塞していたことを意味しよう。そのような彼女の内面の窒息状態が新局面を見出すべく彼女を鳴滝籠りに駆立てたという表現構造をとったのだと思われる。それが「へことば」の「へ停滞」となって現象化したのだ。そこに作者道綱母の叙述意識が顕在化しているとも言えよう。

そこで、これらの表現を蜻蛉日記成立以前の作品や蜻蛉日記とはば成立時期を同じくする作品に求めてみると、例えば、

○これを、かぐや姫聞きて、我はこの皇子に負けぬべしと、胸つぶれて思ひけり。（竹取物語）

○人に逢はむつきのなき夜は思ひおきて胸走り火に心焼けをり（古今集・誹諧歌・小野小町）

○涙にも思ひのきゆる物ならばいとかく胸は焦さざらまし（後撰集・恋二・貫之）

○身の憂きをすればはしたに成ぬべし思へば胸の焦れのみする（同右・雜四・伊勢）

とあり、さらには、宇津保物語の諸巻の成立に関して、ある程度長期にわたる期間を想定せねばならず、例えば最初の巻である俊蔭巻を例に取ると、巻内においても後の増補部分がある可能性もあって、蜻蛉日記との直接関係を云云することは極めて困難だが、参考までに蜻蛉日記における表現と類似したものを宇津保物語に求めてみれば、

○もののをりふしごとに、ちぎりしことをあはれに、ありさまのらうたげなりしをおもひいでつつ、（中略）ちちにおもひくだけれど、のたまふべき人しなれば、心にこめてあり

へ。たまふ。(俊隆)

○としごろ、むねのほほさめずなげきわたりつることを、仏世におはしましければ、……(吹上・下)

○そこばくの人、きも心をくたきておほなかに、源宰相あをくなり、あかくなり、たましあもなき氣しきにてさぶらふを、

……(菊の宴)

○源宰相、こころたましめをくだきて、おもひなげくことかぎりなくて、ひやうあのみきをよびて、かくきこえ給ふ

わくがごと物おもふ人のむねの火におつるなみだのたまきをますかな(同右)

○「かの三条にありけることぞや。こそまづあめりしか。おやのはいとかなしうききしかば、ただなきにぞなかれし。(中略)いとあらあらしくおそろしくおぼえん、むねなんはしりし。」(国譲・中)

○「かの御かたに、いざとくひとさぶらへ。きくやうあり」との給へば、めのとむねつづれて、いかできき給らんと。(同右)

とあるように、蜻蛉日記と宇津保物語という二つの作品の間には表現の類似性が目につくが、両者の成立の前後関係が確定できない現状では、このような表現形態が当時の風潮ではなかったと推定するにとどめておくことにする。以上によって、これらの表現の類似性が時代の風潮であり、必ずしも作者道綱母の創始ではないにしても、それらが蜻蛉日記においては単発的なものではなく、彼女の内面を重層的に表現しているものであり、さらには、彼

女のはかない身の上を剔抉しているところに、作者道綱母の表現論理が独自性になつてゐるのだとも言えよう。

その上注目されるのは、天禄元年の終わりから翌二年の鳴滝籠りに出発する個所にかけて、

④十一月になりて、大嘗会としてののしるべき、その中にはすこし間近く見ゆるこちす。(中略。兼家が道綱ノ世話ヲ色色トシテクレタ為ニ) いささかむかしのことちしたり。

⑤それよりしも、例のつつしむべきことあり。二日(注一十一月二十二日)も、かしこになむと聞くにも、たよりにもあるを、さもやと思ふほどに、夜いたく更けゆく。ゆゆしと思ふ人もただひとり出でたり。胸うちつづれてぞあさましき。ただいまなむ帰たまへる」など語れば、夜更けぬるに、むかしながらのこちならまししかば、かからましやと思ふ心ぞいみじき。それより後もおとなし。

⑥(十二月十七、八日)今日の昼つかたより、雨いたうはらめきて、あはれにつれづれと降る。まして、もしやと思ふべきことも絶えにたり。いにしへを思へば、わがためにしもあらじ、心の本性にやありけむ、雨風にも障らぬものとならはしたりしものを、今日思ひ出づれば、むかしも心のゆるぶやうにもなかりしかば、わが心のおほけなきにこそありけれ、あはれ、障らぬものと見しものを、それまして思ひかけられぬと、ながめ暮らさる。

⑦(同日)雨の脚おなじやうにて、火ともすほどにもなりぬ。南面にこのごろ来る人あり。足音すれば、「さにぞあなる。

あはれ、をかしく来たるは」と、わきたぎる心をばかたはら
におきて、うち言へば、年ごろ見知りたる人、向かひみて、
「あはれ、これにまさりたる雨風にも、いにしへは、人の障
りたまはざめりしものを」と言ふにつけてぞ、……

④山路なでふことなけれど、あはれに、いにしへ、もろともにと
み、時々はものせしものを、また病むことありしに、三四日
もこのごろのほどぞかし、宮仕へも絶え、こもりてもろとも
にありしは、など思ふに、はるかなる道すがら涙もこぼれゆ
く。供人三人ばかりそひていく。(二年六月)

とあるように、〈むかし〉〈いにしへ〉なる〈ことば〉が兼家との
関係において集中的に用いられていることが重要だ。〈むかし〉
〈いにしへ〉と〈いま〉とを対照化することによって、〈むかし〉
とは隔絶した〈いま〉の道綱母のありようが浮彫りにされている
わけだが、④の「むかしも心のぶるやうにもなかりしかば」にお
ける「も」から考えると、〈いま〉だけではなく、〈むかし〉から
〈いま〉に至る連続相として彼女の沈痛な内面が記されている点
が注目される。すなわちこの記事は、④⑤のごとき〈むかし〉と
〈いま〉という相対的時空を、〈むかし〉から〈いま〉へと至る
連続的時空の中に位置づけることにより、作者道綱母ははかない
身の上の絶対化を意図しようとしたのだ。とすれば、これは前述
の⑤以降に引用した身を切裂くような彼女の内面を記したものと
ほぼ時期的にも一致するものであると考えられよう。彼女は〈い
ま〉よりも兼家との夫婦仲が順調で、彼女にとって〈いま〉よ
りも兼家の誠意が見受けられた〈むかし〉の状況を想起するの

はあるが、その〈むかし〉にすべてを還元できない彼女の沈痛な
内面こそ、兼家の「前渡り」からもたらされる焦燥と密接に連関
するものであらう。

また安和二年十一月の条に、

雪いと深くつもりて、いかなるにかありけむ、わりなく身心
憂く、人つらく、悲しくおぼゆる日あり。つくづくとながむ
るに、思ふやう、

ふる雪につもる年をばよそへつつ消えむ期もなき身をぞ
恨むる

という記事があるが、これは傍線部からもうかがわれるように、
道綱母が我身のはかなさを詠んだいわば独詠歌だと考えられる。
これ以降天禄二年の鳴滝籠りに至るまでの間に記されている道綱
母の歌十三首（天禄元年の唐崎祓いの折、彼女は「しりなる人」
と連歌形式の贈答をしているが、数には含まない）のうち、実に
四分の三程の歌が彼女の独詠歌であり、それらの一部を引用する
と、

(A)夜のうちはまつにも露はかりけり明くれば消ゆるものをこ
そ思へ

(B)驚も期なきものや思ふらむみなつきはてぬ音をぞなくなる。

(C)思ひせく胸のはむらはつれなくて涙をわかすものにぎりける

(D)降る雨のあしとも落つる涙かなこまかにものを思ひくだけば
(E)世の中にあるわが身かはわびぬればさらにあやめも知られざ

りけり

とあるように、彼女の切裂くような身のはかなさを詠込んでお

り、今まで述べてきた鳴滝籠り以前の表現のありようとも一致するのである。

ところで、道綱母が鳴滝籠りに出かける寸前、道綱に兼家あての手紙を託し、彼からの返事が記されているのだが、彼女がそれを見るやいなや、「まいて急ぎまざりてものし」た由が描かれている。たとえば、「長期の参籠ゆえ、夫に断らねばならない」としても、道綱母が兼家に知らせたのは、彼女の兼家に対する心理的威嚇を物語っていると思われるが、それはまた兼家との駆引きによって、彼女が心的優位性に立とうとしたとも考えられよう。この後に、前述した④の記事と重複するが、鳴滝に赴く途次は次のように記されている。

山路なでふことなけれど、あはれに、いにしへもろともにのみ、時々はものせしものを、また病むことありしに、三四日もこのごろのほどぞかし、宮仕へも絶え、こもりてもろともにありしは、など思ふに、はるかなる道すがら涙もこぼれゆく。

この中で傍線部のごとく「もろともに」、すなわち、兼家といっしょだったと二度も記されているのは注意されよう。これは上巻応和二年における章明親王との交歓を中心にした記事の個所での道綱母と兼家との状態を物語っているのだが、彼女の内面は上巻時点よりもさらに屈折していることは、へいにしへ兼家ともろともだったことを想起していることから理解されよう。これは、いわば道綱母に一時的にせよ精神の安らぎを与えた時のものであるのだが、その過去の時空を天禄二年という時点における状

況と比較することによって、作者道綱母が鳴滝へ赴く彼女の切裂くような心境を適確に表現していると同時に、この二つの「もろともに」がいずれも上巻の該当記事のところでも二人の「もろとも」なる状態が叙述されていたのを考えると、上巻における兼家との「もろとも」なる状態は彼女にとって心に深く刻込まれた楽しい一時であったことを意味していよう。とすれば、この上巻の「もろとも」なる状態を作者道綱母が詳細に叙述したことは、彼女にとってそれが絶対的時空として認識されていたことを物語っているのではないのか。そのような上巻の状況を再現すべくもないのが、中巻の二人のありようだったのだ。

中巻における、特に鳴滝籠りに至るまでの表現の特色は、へことばの「停滞」となって現象化したのだ。それは道綱母の「思考」することの絶望的状况だとも言えよう。すなわち、執筆時においても表現することを拒絶するがごとき、そのような彼女の身を切裂くような状況が、鳴滝籠りを決行させたのだと、作者道綱母は記しているのだ。

三

以上のように、道綱母が鳴滝へ赴くまでの彼女の内面を追跡して来たわけであるが、兼家の度重なる「前渡り」に起因する彼女の身を切裂くような状況を作者道綱母は一つ一つ記すことによって、鳴滝籠りを決行せざるをえなかった正当性を訴えている。もちろん、それは道綱母側の一方的な視点からではあるが、作者道綱母が同一の「へことば」で繰返し表現しているのを、へことばの

〈停滞〉として強烈に印象づけられるのは、それだけ彼女の内面が閉塞状態にあったことを物語っている。すなわち、それは彼女の表現力のなさというような性質の問題ではなく、表現すべき〈ことば〉の欠如それ自身が〈思考〉することの絶望的状况をもたらしているという点を看過してはなるまい。道綱母をそのような状態にさせた人物として兼家は描かれているわけだが、それゆえに鳴滝籠りという行動に出ざるをえなかったのだと、作者道綱母は記したのである。いわば籠るということとは、道綱母にとって聖なる時空への脱皮を志向するものだとしても、種種の葛藤の末、兼家に強制的に下山させられたわけであるから、彼女にとっては籠ることにによる〈聖化〉は遂げられなかったのだと言えよう。

* 本文の引用は、後撰集（国歌大観）、宇津保物語（宇津保物語研究会編『宇津保物語』）を除いて、日本古典文学全集中によったが、まま私に一部表記を改めた個所がある。

注(1) 拙稿「蜻蛉日記の基調——道綱母の叙述意識をめぐって——」（文芸と批評 第五卷一号 昭五四・2）と一部重なる点があるのを御断りしておく。

(2) 今井源衛氏は『前渡り』について——源氏物語まで——

（中古文学 第十七号 昭五一・5）の中で、「前渡り」を「素通り型」と「さまよい型」の二種類に大別し、「素通り型」の方は蜻蛉日記や歌集に記されているが、初期物語に記されていないのは、初期物語が男の手に成ったためであると説明している。それはそれとして、女性の手に成った蜻蛉日記における兼家の「前渡り」に関する描写は注目に価するものと言えよう。

(3) 例えば、鳴滝に籠った道綱母に、ある人が「ことば書きあふべくもあらず。入相になむ肝くたくこちする」という消息をよこした条に、「肝くたく」と表現されているが、このような表現は、⑤から⑪以外の個所では、対兼家関係には使用されていない。

(4) 諸注「時しもあれ花の盛につられれば思はぬ山に入やしなまし」（後撰集・春中・藤原朝忠）を引歌とする。

(5) 小西甚一「俊蔭巻私見」（国語国文 昭二九・1）など。

(6) 上村悦子「蜻蛉日記覚え書」（平安文学研究 第六十一輯 昭五四・6）

(7) 西郷信綱『古代人と夢』第三章「長谷寺の夢」参照